

■特定課題セッションⅡの報告

『障害×女性と社会福祉-性と生殖をめぐって』

コーディネーター：田中恵美子（東京家政大学）

特定課題セッションは、2022年10月16日、大会2日目の午前中に設定された。会場にはこの課題に興味を持ってくださった方々が参集し、少数精鋭で密度の濃い議論を行うことができた。

はじめに主催者田中恵美子が趣旨説明を行った。障害女性に対する注目は2006年に障害者権利条約が国連で採択され、「複合差別」という言葉が障害女性の状況を表すものとして、国際条約に初めて書き込まれたことによる。障害女性が複合差別を経験する場面の一つとして性と生殖に関する権利(SRHR)に関するものがある。本年9月に提出された総括所見においても、障害女性の性と生殖に関し、実態調査の必要性、加害者が処罰され、被害者が救済を受ける仕組み、包括的性教育の実施などが勧告された。

最近の日本の状況として、障害福祉の支援下でありながら、知的障害女性の出産直後の遺棄事件が3年連続で起きている。障害女性、特に知的障害女性のSRHRに関連して、障害福祉は何を支援しているのか。

続いて、岩田千亜紀会員は「地位・関係性を利用した障害女性への性暴力—障害者施設における障害女性のSRHRが保障される支援を目指して—」と題して発表を行った。施設職員が地位・関係性を利用して障害者に対し性暴力を行った事件が報告されている。だが、性暴力は通常潜在化しており、日本では統計調査もないため、その実態は明らかとなっていない。障害者施設では、支援者がパターンリズムによる支援を実践しやすく、性暴力の発生及びその表面化を阻害している。こうした現状を変更するためには、SRHRを尊重した支援に関する研修の実施と、地位・関係性を利用した性暴力に対する刑法の厳正化等が求められる。

延原稚枝会員は「知的障害者の性的表現・行動に対する支援者の意識調査—知的障害者の出産・育児に焦点をあてて—」と題し、知的障害者支援事業所の支援者に対する質問紙調査に基づき発表を行った。多くの支援者は知的障害者の性的権利の享有を認識し、性的表現・性行動を概ね肯定的に認識していた。一方、本人の同意があっても妊娠に至る可能性がある性行動を容認し難いと認識する支援者が存在し、それは知的障害女性に対して強く意識されていた。これが社会構造上の課題であるならば、性的なことも知的障害者本人の希望並びに意思と選好に基づいて支援することができる、社会環境の再構築が不可欠であるといえる。

門下祐子会員は「知的障害者が語る、『性』に関する経験やニーズ」と題して発表を行った。知的障害者へのインタビューの結果、ポジティブな人間関係の話題があった者は、基盤となる性知識や情報を持っており、多様なニーズを表明した。ニーズの表明には、聞き手の共感的な態度等も影響した。ニーズの内容として、男性は実際の性的行為など焦点的な「性」、女性は人間関係など包括的な「性」について語った。男性は従来セクシュアル・プレジャーの「主体者」と認識される面があるが、女性はそうした認識がされず、「保護」の視点が優先されていることの影響が窺われた。

質疑応答を経て、性を享受する主体として障害女性を捉え、支援する体制の整備についてさらに研究を積み重ねていく必要があることが示された。